

誰だ？ 花園を
荒らす者は！

中村武羅夫

誰だ？ 花園を荒らす者は！

——イズムの文学より、個性の文学へ——

一

文芸は、言うまでもなく広い意味に於ける人間の生活を対象とし、題材とするところに成り立っている。人間生活がないところに文芸はあり得ない。あらゆるイズムに属する文芸が——自然主義の文芸も、象徴主義の文芸も、神秘主義の文芸も、その表現とか様式とか、観点とか、その他にはいろいろの差別なり特徴なりがあるとし

ても、結局、人生——即ち広い意味の人間生活に、何等かの意味に於いて関心を持つところから生れて来ていることには、変りはない。或る人に依っては、自己のため
の芸術が主張される。が、「自己のため」ということも、窮極するところは、あらゆる人間のためということになる。人間は、無人島の中に、たった一人で生活しているものではない。多くの人間の集団の中に、社会的環境の中に、一つの細胞として生活していることが事実であつて見れば、たった一人の個人というものを、絶対的に抽象して考えることは不可能だ。いくら個人と言つても、

いろいろな個人と個人との相関的關係の下に置かれた個人であつて、厳正な意味に於ける本当に単独な個人というものは、事實に於いて成り立ちもしないし、考えることも出来ない。どんな個人主義者だつて、それは多くの個人と個人との間に挟まった個人主義者であつて、絶対の個人主義者であることは許されない。結局、如何なる個人も、個人主義者も、その存在は、他のあらゆる個人との相関的關係の下に於いてのみ成り立っているのである。単独に、一つの細胞だけが、その存在を保つことが出来ない如く、単独に個人だけでは、その生活の意義を

なすことが出来ないのだ。従って如何なる個人も、また個人主義者でも、一つの細胞として、己れの生存を托しているところの大きな生活体に対して、即ち、他の如何なる個人に対しても、それぞれ責任を分ち合っているものである。だから、若し、自己のための芸術を主張する人があつても、厳密な意味に於いては、自己のためということは成り立たないのであつて、「自己のため」ということは、同時に「他のため」であることなのだ。われわれが、単独な個人としては、ただ存在することすら許されていないのに、況んや、芸術の如き「営み」をなす

場合、どうしてもそれを「自己のため」だけに留めて置くことが出来るだろう。若し、それが例え「自己のため」になされたものであっても、その結果は、あらゆる他の「自己」の上に影響し、作用せずにはいない。空気がなければ音もなく、一つの音波が、全空気の容積の上に波打ち作用する如く、或る一つの芸術上の仕事でも、それは直ちに他の自己の上に波打たずにはいないだろう。

われわれは、いろいろ考え方の差別はあるとしても、斯うして社会的集団の中の個人として生きている以上——一つの大きな生活体の中の一細胞として生活してい

る以上、他の個人に対し、またお互いの生活に対して、責任を持合っていることは事実だ。その「責任」を科学的に解剖して見れば、相互扶助的な要素もあるだろうし、また、自然淘汰的な要素もあるだろう。人間共存の現象は、相互扶助だけでも決定出来ないし、そうかと言って、自然淘汰だけでも解釈出来ない。その二つの作用が或る時代に依り、或る環境に依って、こもごも相交錯し、綯い交って行われていると見るのが本当だと思う。或る場合には、相扶けている。だが、或る場合には相闘っている。扶けていることだけが事実でもないし、闘っている

ことだけが事実でもない。地球に暗と光りとがある如く、人間生活にも、闘争と扶助とが、或いは同時に、或いは交互に行われているのだ。感情的に言っても、われわれは、或る場合には憎み、或る場合には愛している。また、憎みながら愛していることもあれば、愛しながら憎んでいることもある。

私は、そういう人間同志の関係を、お互いに責任を持ち合っているのだと言いたいのである。相互扶助的な関係にせよ、自然淘汰的な関係にせよ、それらがごっちゃやに入り交った関係にせよ、また、愛する関係にせよ、憎

む關係にせよ、愛憎二つが入り乱れ、縋い交っている關係にせよ、われわれの生活が、いろいろな意味と、いろいろな形とに於いて、相交流し、相交錯している事實を指して、責任を持ち合っているのだと言いたいのである。

文芸は、人間が単独であるところには生れない。われわれが、地球の上に、たった一人の人間として残された場合を仮定して、想像して見よ。恐らく、歌も歌わないだろう。自分以外の誰かがあり、そして、その自分以外の誰かに対して、有意識的にせよ、無意識的にせよ、関心を持つところに、文芸やその他の芸術は生れるのだ。

われわれが文芸やその他の芸術的な仕事を営むのは、有意識的にか或いは無意識的にかの差別はあっても、また、その濃度の違いはあっても、帰するところは、自己以外の他の存在を認め、それに対して関心と責任とを持つところ根ざしていると思う。人間に言葉があるのは、自己以外の他の存在があればこそである。言葉がなければ、芸術はない。絵画や彫刻の如き芸術は、結局、形に依る言葉である。

だが、或る人間が、己れ以外の人間に対して関心を持つていているという事実には、万人が万人變りがなくても、その関心の持ち方には、万人万様の差があることは言うまでもない。その性格のために、立場のために、環境のために、人生觀のために、世界觀のために、そして、その他のいろいろな原因と理由とのために、関心の持ち方、責任の分ち方に、いろいろの差別が生じて来るのは、当然のことである。僅かに自分一人のことしか考えられない人間もあれば、自分の親兄弟、或いは親戚友人のこと

くらいしか考えの及ばない人もあり、また、自己の属している民族くらいのことにはしか考えの及ばない人もある。そうかと思えば、全人類の悩みと苦しみを悩み苦しみ、全人類の喜びと悲しみを、自分の身一つに実感する人もある。

古来、自分以外の他の生活に対して、責任を感じることが深く広い人ほど——全人類の悩みと苦しみを、身一つに引き受けて、悩んだり苦しんだりした人ほど、われわれの前に偉大な人間として残されている。釈迦だつてそうだ。キリストだつてそうだ。トルストイやドスト

イエフスキイだってそうだ。意味は違っても、マルクスだってやっぱりそうだと思う。思想の基礎や、目ざしている方向の違いはあっても、そして、余りに唯心的にのみ傾いていた考え方を、唯物的に置き変えた違いはあっても、結局、その根本に人類解放の情熱を持たなければ、マルキシストの聖書たる「資本論」は書けなかつたに違いないのだ。社会組織の改造に対しては、冷厳な科学的方法を説くとしても、その内に潜んでいるものは、結局、人間解放の情熱でなければならぬ。

われわれが、自分以外の他の生活に対する関心の持ち

方、責任の感じ方にはお釈迦さま流もあれば、キリスト教流もあり、トルストイ流もあれば、ドストイエフスキイ流もあり、勿論、マルクス流のあることも言うまでもない。これは時代にも依り、社会状態にも依り、またその国民の感受性の如何に依っても、いろいろに別れると思う。われわれ日本人の国民性は、独創に乏しいと言われている。模倣性に富んでいると言われている。それだけに感受性が鋭敏で、他のために影響され易い国民だと言われている。或いはそうかも知れない。また、そうでないかも知れない。ここで私は、日本の国民性に対して

断定を下す勇氣を持たないが、ただ確かに次ぎのようなことだけは、はつきり断言することが出来る。

即ち、今までのところ日本人は、自から或る時代の思想を支配する偉大なる人格者は持たないが、偉大な人格者のために、すぐれた沢山の使徒は持っている。お釈迦さまに依って蒔かれた仏教の種は、そのよき使徒に依って、どれだけ日本人の上に芽生えたことかしのれない。キリスト教だって、儒教だって、トルストイの人道主義だって、マルキシズムだって、やっぱりその通りだ。われわれは、われわれの国民の中に、一人の釈迦を持たな

い。一人のキリストも、一人のトルストイも、一人の孔子も、一人のマルクスも持たない。だが、それ等のよき祖述者、よき使徒は、如何に沢山々々持っていることだろう。或る時代には、仏教が日本を風靡した。或る時代には孔孟の教えが、或る時代にはキリスト教が、或る時代にはトルストイズムが、そして現代の今は、マルクシズムが――

三

われわれは、どんなに個人主義的な思想を持つ人々であつても、結局その個人主義的な思想に於いて、自己以外の他の個人に対して関心を持ち、責任を分っているものであることは、先にも言った。個人主義者ですらそうである。況んや、個人主義以外の他のイズムに依る人、他の傾向に在る人が、どうして自己以外の他の個人に対して、また、それ等の個人の集団たる社会に対して、無関心無責任でいられるだろうか。必ずしもマルクス主義に依ると依らないとに拘らず、それぞれが、それぞれの立場に於いて、それぞれの人生観なり、世界観なりに於

いて、人類共存の事実に対して、或る責任感を分ち合っているのだ。

だが、マルクス主義を信奉する使徒たちは、マルクス主義を奉じない人々の、人間及び社会に対する関心の持ち方や、責任を分つ実感を排撃し、否定しようとする。マルクス主義に依る社会組織の変革だけを唯一絶対のものとして、その他の主義思想に依っての人間性の改造、社会組織の改造方法は、これを認めるだけの雅量すら持たないのである。

そして、彼等は——マルクス主義の使徒たちは、それ

を文芸上の営みの上にまで持って来ようとしているのである。私は、マルクスの学説が、社会科学として研究される限りに於いては、そしてその当然の帰結として、マルクスの学説が實際行動に移される限りに於いては、何も言うべきことを持たない。自由に研究されるべきであり、また、自由に實際行動の上に移されていいと思っている。

だが、文芸をマルクス主義宣伝のために利用し、階級闘争の手段として役立てようとする主張には、そして、マルクス主義としての明確な目的意識を持たない文芸

を、十把一束的に、ブルジョア文芸として排撃し、マルクス主義の目的の下に隷属しない作家を、直ちにブルジョア作家として否定し去ろうとするような、粗笨と横暴とに対しては、文芸の正道的立場の上から、飽くまでこれに反対せずにはいられないものだ。

文芸の対象は、人間であり、人生であり、社会である。しかも、それを抽象的に取扱うところには文芸などあり得る筈はなく、それを具象的に取扱うところに、初めて作品があり、芸術があるのだ。マルクスの学説は、飽くまで社会科学であり、哲学であって、その学説を實際行

動の上に移すことは、勿論可能であっても、それを芸術に結び付けることには、いろいろの無理と不自然とがある。その無理や不自然に対して、何等の合法的な解決も下さずして、無理や不自然のままに、マルクスの学説と芸術とを結び付けようとするところに——単に結び付けるだけに止まらず、マルキシズムに依って、文芸を規定しようとするところに、プロレタリア文学の主張者たちの横暴があるのだ。

たとえば、実際の例を或る作家なり作品なりに取って見る。佐藤紅緑氏や菊池寛氏は、ブルジョア作家として、

また、その作品はマルクス主義を奉じない故を以て、ブルジョア作品として、プロレタリア文学の主張者たちからは、非難され、排撃を受けている。

だが、私などの如く、極めて自由にして公平な立場に立って、ものの真実を見ようとする者にとって、佐藤紅緑氏や菊池寛氏を直ちにブルジョア作家として片付け、その作品をブルジョア作品として片付けてしまうことが出来ないのだ。なるほど佐藤紅緑氏や菊池寛氏は、マルキシズムを信奉していない作家であるとしても、彼等の思想の中に、彼等の生活の中に、現在の社会組織の

不合理に対する正統な認識と、更らに積極的な反抗と、人類解放の要求とが、どうして含まれていないと言えるだろう。たとえば実際には、毎日、自動車を乗り廻す生活をして、そういう生活を如何に受け入れ、如何に見ているかが重大な点であろう。単に洋食を食って、自動車を乗り廻す生活の外見だけを見て、ブルジョアと決定するならば、ソビエツト・ロシヤの大使でも、そのロシヤの国賓として大使待遇を受けていると言われる片山潜でも、これ悉く大ブルジョアではないだろうか。私は、いつか「新潮」の合評会の時に、確かに私の目を以て見た

のであるが、先のロシヤ大使、ドブガレウスキイ氏は、立派な洋服を着、絹の靴下を穿き、上等のワイシャツ、華やかなネクタイを着け、贅沢なケースから、香りの高いシガレットを取り出して吸うていた。勿論、自動車を待たしてあつたことは言うまでもない。

若し、生活の外形が、それをブルジョアとプロレタリアとに規定するなら、ソビエツト・ロシヤの大使ドブガレウスキイ氏は、確かに大ブルジョアでなければならぬ。佐藤紅緑氏や菊池寛氏以上の大ブルジョアでなければならぬ。つまり、マルキシズムを奉ずることに依つ

て、自らブルジョア生活を営んでいるところのブルジョア階級なのである。

それなのに、佐藤紅緑氏や菊池寛氏は、ブルジョアと非難され、大ブルジョアの生活を営んでいるドブガレウスキイ氏は、なぜ非難されなくてもいいのだらうか。ただ、それがマルキシズムに依っていると、いないとのためであらうか？

片岡鐵兵氏や今東光氏が、左傾したと伝えられている。だが、左傾した彼等の生活が、どう違って来たであらうか？ 彼等の作品が、どう違って来たであらうか？ た

だ、マルクス主義の話をするだけなら、今は、ブルジョアでも誰でも、マルクス主義の話もするし、それに関する読書くらいはしているのだ。若し、左傾したと言われている片岡氏や、今氏の生活や作品が、ブルジョアと攻撃されている、紅緑氏や寛氏の生活や作品よりも、もっとブルジョア的であるとすれば、おかしなものではないだろうか？　しかしながら、このことは、左傾した片岡氏や今氏に責任があるわけではない。それをいろいろ問題にしたり、謳歌する人々の立場がただ滑稽なだけである、余りに安価に過ぎるだけである。

自から左傾したと名乗ると名乗らないとに拘らず、ブルジョア作家と非難される佐藤紅緑氏や菊池寛氏の生活や作品の中には、勿論ブルジョア的要素もあるには違くないが——左傾したと称される今東光氏や片岡鐵兵氏の生活や作品にもそれがある通り、そして、他のすべての左傾している人々、及び左傾している文学者の中にも、或る度合に於いてそれが混っている如く——また、左傾的要素も含んでいるのだ。それなのに一方は非難され、攻撃され、一方は謳歌されるのは、私には矛盾もまた甚だしいものに思われるのだ。

人間は、いろいろな面と、いろいろな要素めんを持っている。人間の思想や生活は単なる主義を以て統一することの出来ない複雑なものの総合であり、集積である。そして、文芸家の職能は、イズムに依って截然と赤と白とに別れてしまうことではなく、簡単に赤に別れることも出来なければ、また簡単に白にも別れることの出来ない人間生活の本然の姿を指摘し、描出することではなければならぬ。赤であることは簡単だ。白であることも簡単だ。が、深く見、深く考えて、真を追求することの烈しい欲求を持っている者は——言い換えれば良

心の旺盛な者は、簡単に赤であり白であり得ないのだ。そして、この良心の最もすぐれた者ほど、芸術家として最も卓越した人でなくてはならない。

四

人間が生きて動いている実体は、主義や思想ではなく、個性である。人間の行動を、生活を支配しているものは、主義や思想の力であるよりも、個性の力である。そして、人間や生活を対象とするところに、初めて存立の意義を

持つ文芸の世界に於いて、主義や思想よりも、個性が重んじられなければならないのは、元より余りにも当然のことではなければならぬ。芸術に主義や思想が加味され、混り合つて来ることはいい。社会主義を奉ずる作家の作品に、自ずから社会主義の色調が加わつて来るのは当然のことであり、それはそれで毫も差支えないばかりでなく、大いに結構である。それが作品としてよきものである以上、われわれはオスカア・ワイルドの唯美主義の作品も愛読するの一方には、また、バアナード・シヨオや、アナトオル・フランスや、マキシム・ゴールキイの作品

をも愛読するのだ。「悪の華」の詩人ボードレルの詩にも惹き付けられれば、ヴェルレーヌの詩も愛誦するし、象徴派のマラルメの詩にも、また、興味を感じずるものがある。人生が広く、複雑である如く、人生に立脚している芸術の世界も広く、また複雑である。そして、そのいずれにも、それがよきものである限りは、魅力と牽引とを感ぜずにはいられないものだ。

花は何んの為に開くかを知らないだろう。小鳥は何んのために歌うかを知らないであろう。恐らく、咲き満ちた花の美しさには、プロレタリア的イデオロギイもなけ

れば、ブルジョアのイデオロギイもありはしない。小鳥の歌も同じことだ。

併し乍ら我れ我れは、無心に咲く花の美しさに対しても、やっぱり美しいと感ぜずにはいられないし、無心に歌う小鳥の音楽に対しても、やっぱり楽しみを感じずにはいられないものだ。季節々々が廻って来れば、美しく咲く花を見て、これは階級闘争の目的意識がないからと言って——階級闘争的精神に燃えていないからと言って、又、こんな花の美しさや、小鳥の歌は、ただブルジョアの目や耳を楽しませるだけで、プロレタリア階級に

は用はなく、だからブルジョアの娯楽物だとして、片っ端から花や小鳥を撲滅して廻ろうとする者があつたら、それは馬鹿か狂人でなくて何んだらう。

花は花の性質に依って、赤い花も咲けば、白い花も咲く。若し赤い花の美しさだけを認めて、白い花の美しさを感ずる者を、封建的だと嗤う人があるなら、そんな人間こそ却って馬鹿か狂人として嗤われなければならないだらう。

芸術は「美」に立脚する。いろいろな複雑な意味を含んだ「美」に立脚する。人間の感情と文化の上に開く花で

ある。赤い花もあれば、黒い花もあり、紫の花もあれば、白い花もあるだろう。よく咲いた花は、皆それぞれに美しい。

誰だ？ この花園に入ってきて来て、虫喰いの汚ならしい赤い花ばかりを残して、その他の美しい花を、汚ない泥靴で、荒らして歩こうとするのは！

勿論、花は無心に開き、小鳥は無心に歌うのであるが、芸術は、人生に対し、社会に対して、積極的な関心を持つ人間の営みであることは言うまでもない。社会人生に對して関心のないところに芸術はあり得ないのである

が、人生社会に対する関心が、必ずしもマルキシズムに依って干渉される必要はないのだ。マルキシズムに依って、人生社会に関心を持つことを元より妨げないが、その他のいろいろなイズムと、面めんと、個性とを以て、人生社会に関心を持ち、責任を分ち合うことも、また甚だしく必要である。マルクス主義はなくとも文芸芸術の世界はあり得るのだ。

イズムの文学より、個性の文学へ——

——一九二八・六——

日本文学電子図書館

誰だ？ 花園を荒らす者は！

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治大正の文学者」

発行者：中村克子

昭和44年5月1日 印刷

昭和44年5月5日 発行

日本文学電子図書館